チベット高原の東北角——少数民族の反中国感情はどこからきたか

阿部治平

草地を争う

一九九六年七月、私は甘粛省南部のある県政府所在地のまちかどで、新築ラッシュの街並みをながめていた。すると友人のゴンボ君が緊張した面持ちで近づいてきて「また人が死んだ」という。昨日、山のこちら側とむこう側の半農半牧の集落同士で射ちあいをやった。原因はどちらかの羊が牧野の境界をこえたことにある。

政府主導の開墾とその後の過剰放牧で良好な牧野はへっている。しかも九〇年代になって羊肉の需要はふえた。羊は一頭でも多く飼いたいし草地は少しでもほしい。農業に請負制が行われたのと同様に牧畜も自営制に変わった。それにともなって、草地が個人に分けられたから伝統的な境界争いも深刻になったのである。牧民はたいてい旧式の銃を公式に登録しておいて、撃ち合いをやるときはラオス・ベトナム・ミャンマー国境から密輸された高性能の銃をもちだす。羊三〇頭くらいで買えるというから、自動小銃が牧民のあいだに普及したのも自然のなりゆきである。

「こっちとむこうで一人ずつ死んだ。けさ病院で一人死んだからまた射ちあいになるね。ラブラン寺のラマ（尊師、一般の僧侶はアク）が山に行ったからおさまるといいが」

ラマは境界の尾根でビャクシンの枝をもやし経をよむ。双方の話をきいて、死傷者の少ないほうから多いほうに「命価」を支払わせ銃撃戦を終わらせる。伝統的な方法であるが、これでみな納得する。公安は金をたくさんもらったほうの味方をするから誰もあてにはしていない。黄河湾曲部のチベット人とモンゴル人の草地争いは、県政府同士の交渉はおろか、甘粛・青海両省政府間交渉でも難航したが、ラブラン寺のゴンタン活仏が調停にはいるとすみやかに解決した。

だが近年、法治国家ということで、草地紛争に中国の刑法が適用され、万元単位の「命価」を賠償した上に刑事責任を問われることがある。おもな働き手が逮捕投獄されたらその一家はおしまいだ。ゴンボ君も半農半牧だから羊を十

青海省ホショトモンゴルの夏のゲル
旧式銃をもち記念撮影する旅行者

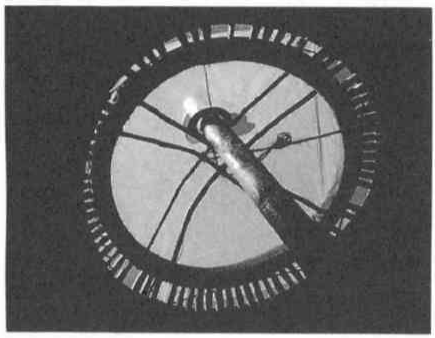
数頭持っている。ひとごとでなかろうと思うが、この素朴な民族主義者の憂鬱の原因はそこにはない。

「羊が草を食ったくらいで殺し合いをしていたのでは、チベット人やモンゴル人は市場経済の波にうまく乗れない。この町の大通りをご覧なさい。政府のおもなところは中国人、商売は回人だ。新しくできたホテルや食堂や商店は、みな回人と中国人のものだ。彼らはチベット人が羊を売り、衣服を買い、食堂で飯を食うたびもうけているのだ。銀行の高額預金者はみなかれら個人経営者だ。やつらは牧民の金を奪っているのも同然だ」

甘粛から青海に入るとホショトモンゴルの冬の定住集落がある。「あなたがたも鉄砲を打ち合って草地を争そうのか」と聞くと、「やるよ、でもモンゴル人同士じゃやらない、あの尾根の向こうの連中とやるのさ。タングートの連中は昔からどろぼうだよ」という答えがかえってきた。それは、私に親切にしてくれたチベット人たちを指していた。

「先進的な中国人おくれたチベット人」

「紛争をさける処世観と宿命論といった消極性のほか、宗教上の迷信的影響が依然として存在している。生産や生活のなかで災難にあうと、ほとんどのひとは自分自身の力量と創造性にたよらないで神にたよる」と、チベット人の「素質」について中国人の経済学者は語っている（王小強・白南風『富饒的貧困――中国落後地区的経済考察』四川出版社、一九八六）。著者らは八九年民主運動に参加したこともある、中国人のなかでは最良のチベット理解者といわなければならない。それが、二頭だての犂で畑を耕すことをあげて農法



ホショトモンゴルのゲル天幕
内モンゴルでは傘状に放射している骨が
十字に組合わせてあるのが特徴的

の後進性をあげつらい、チベット人の保守性を非難するのは救いがないが、わたしの中国人の友人たちも「チベット人は経済力がない、それに統治能力がないから、独立してやっていけない」といった。チベットへの中央政府の援助が巨額になっていることをみな意識しているのである。ゴンボ君らに話したら苦笑いした。

「中国人にやれることをチベット人にはできないと思っているんだね。故障しても直らないトラクターよりヤクがひく犂のほうがいいことだってある」

彼の友人たちとの話が「孔繁森」になった。孔氏は幹部としてチベット自治区に赴任して悪戦苦闘のち、九三年に殉職したという模範的人物である。日本でも肯定的に報道されたことがある。だが若者たちにいわせれば「なにをいいやがる」ということになる。

中央政府の援助で建設される豪勢な政府の建物・大型発電所・自動車道路・赤字続きの工場、いずれもチベット人の生活にはあまりプラスにはなっていない。しかしそれは現地で実権をにぎる中国人官僚のふところをうるおす。

中国人が援助と称してチベット自治区へ赴任すれば、チベットの職場から何倍かのわり増し賃金をもらう。元の職場からも給料が保証されている。一年つとめれば一ヵ月以上の休暇があって飛行機で帰郷できる。チベット人からさんざん賄賂をまきあげて、三年の任期がおわり原職にかえると昇進する。孔繁森がどうして労働英雄になるのか、というわけだ。

アメリカからの放送を聞く若者たち

九七年夏、青海省につづく広大な草原にある町の食堂で、若い僧侶たちといっしょに食事をした。彼らは酒はさすがに飲まなかった

が、魚のあげものが入った四川料理には箸をつけた。私が仏教徒で中国人でないと分ると、赤い僧衣を裏がえして禁制のダライラマのバッジをちらりと見せて笑った。いまパンチェンラマが二人いるが、と聞くと、

「本当に困るね。でもダライラマが指名した人が本物だよ。おれたちは中国政府が指名したほうも拝むけど。それにしても本物のほうはどこに隠されたのか、心配だ」

九五年五月、ダライラマは八九年に逝去したパンチェンラマ十世の転生者を選定したと発表した。これに怒った中国政府は、政府系の僧侶に命じて、別に「霊童」を探しだしてしまった。ダライラマ側のパンチェンラマを探しだしたタシルンプ寺僧院長チャドル・リンポチェは逮捕され、九七年に懲役六年の判決を受けた。青年僧たちはこの事件もチベットに対する各国政府の姿勢もよくわかっていたが、中国内の民族問題に対する日本政府の逃げ腰をとおまわしに批判したのには驚いた。

彼らはインドからの帰国者とアメリカからのチベット語放送によって民族運動についての情報を得ている。短波放送にはアムドなまりのアナウンサーがいるから牧民にもわかる。短波放送を聞くのは公式には禁止されているが、短波をキャッチできるラジオは市場に出回っている。電源にはそう不自由しない。町はずれに水路式の小発電所があるし、ひとつで千元くらいの太陽電池も、蓄電池もある。

「インドでの生活は苦しい。気候が悪い。でもインドへ行って勉強したい」と役所につとめる若者がうめくようにいった。中国人の若者がアメリカやオーストラリアにあこがれるように、彼らはインドに希望を見出しているようだっ

町に買物に来たチベット人遊牧民
ヤクの背をおりハンドトラクターで移動

た。とくに若い坊さんは大胆だった。「仏につかえる身だ。現世にこわいものはない。行きたくなったらどこへでも行く」

ラサから遠く離れたアムド地方の若者もヒマラヤを越える方法は知っているようだった。公安当局も巧妙にスパイ網を張っているから若者たちの気分は分っている。しばしばダライラマ関連の情報を得て寺を捜索し僧侶を逮捕する。甘粛省甘南チベット族自治州夏河県のラブラン寺では、九六年に僧坊に公安が入り数人を捕まえた。うちひとりは数ヵ月たっても釈放されない。家族の面会も許さない。拷問で足腰が立たなくなった、便所に這っていっているという情報がそとに漏れてきた。

坊さんの一人が「あそこに入れられているんだ」とバスステーションのうえの建物を指した。坊さんたちは「彼が民族運動と関係していたとは思わない、公安は事件を捏造して成績を上げるつもりだろう」という。

壊される寺・消える僧侶

九四年春四月、草原の寺で私ははじめてガサンジャツォ師と知りあった。私が仏教徒だというと、彼はにわかに好意をあらわにして家に招いてくれた。彼の僧坊は牧民の定住住宅と同じで、外壁は土、内部は木造の平屋だった。部屋の中にはカンがあって座るとお尻がふんわりと暖かくなった。ヤクの干し肉、大量のバターが戸棚においてあって彼の故郷が豊かであることを思わせた。

彼は寺の歴史を聞きたいという私の注文に、「自分の寺の話は思い出すのもいやだ。ラブラン寺のことならいい」といって、他の僧侶や牧民よりすこし大胆に、中国人がチベット人モンゴル人になにをやったかを語った。反右派闘争と文化大革命が仏教をもっとも残酷に破壊したという。

五七年、反右派闘争は、少数民族地域では宗教弾圧・民族指導者の追放となって現われた。ラブラン寺は反右派闘争以前には、三八〇〇人の僧侶がいた。そのうちラマは五〇〇、高僧の転生者とされる化身ラマは六〇であった。「工作組」がやってきて、学問の高低、財産の多少によって僧侶の「階級区分」を行なった。上層に区分されたラマは砂漠のまんなかの甘粛省安西県と蘭北モンゴル族自治県のマツォン・夏河県ロンワ・夏河県アイ山銅鉱山の「労改」におくられた。重労働と飢餓でほとんどの僧侶が死んだ。砂漠の「労改」は逃げ出しても水場に行かないうちに行き倒れるしかけだ。ロンワでは伐採・炭焼きをやらされたらしい。ただ、アイに送られた坊さんに若い人が多く、彼らは試練に耐えて文革後、寺にもどった。

ガサンジャツォ師の父親は紅原

方面でゲリラ闘争に加わった。彼は五八年から六一年まで戦って、食いものが尽きて降伏した。父を助けたというので母と長兄が逮捕され、父は獄死、母と長兄は二〇年間を監獄で過ごし、文化大革命後の八〇年代初めようやく釈放された。

やがてダライラマ亡命につながる五八年の民衆蜂起にはラブラン寺は参加しなかったが、人民解放軍はラブラン寺を軍管制下においた。坊さんの外出も監視つきであった。仏教哲学・医学薬学・暦学・寺院を彩る芸術・建築技術などチベット文化の粋がラマの命とともに消え去った。解放軍はキルギス型トラックを二台つかい、仏具のなかの金や銀でできた器物や宝物、仏像などを、ほとんど五ヵ月かかって持ち出した。門前町や寺周辺の村では兵隊が家宅捜索し、高価な装身具、銅の鍋・皿・壺・銀貨などから簞笥の銅の飾り釘に至るまで何もかも没収した。

一九六六年の文化大革命のときは、甘粛省南部のチベット人地域では紅衛兵ではなく一貫して「軍方」（解放軍）が指揮したという。五八年の反乱鎮圧とくらべると、文革は僧坊と経典などを破壊することにエネルギーをついやした。攻撃すべき人のおおくは、天国か監獄にやられてラブラン寺にはいなかったからであろう。中国人とその「僕人」のチベット人が破壊の中心になった。ゴンタン宝塔は爆薬で破壊され、めちゃめちゃになった（九五年に再建）。印経院のチベット大蔵経の版木はもやされ煙になって消えた。迷信を打ち破るとして、寺院のひとつを家畜の屠殺場にしたから、羊の泣き声が伽藍にひびきわたり、ヤクの肉が売られていた。

日中戦争以後、中国人は日本人をふかく憎んで「鬼子」と呼ぶようになった。同じように過去を知っているモンゴル人チベット人は、だれが殺しだれが破壊しだれが奪ったか語りついでいる。

牧民の蜂起と敗戦

九七年夏、私は青海省河南モンゴル族自治県の「革命烈士公墓」を訪れた。整列した四八の墓をみると、五八、九年に戦死している。チベット人かモンゴル人が一人のほかは全部中国人の名前だった。おもな戦場は墓銘からすれば一ヵ所。この県域内である。革命後、十年もたってからなぜ死んだか。近くの牧民に聞いても多くの人はこの話題をさけた。ただひとりだけがハネガヤのおおい草原のテントのなかで話してくれた。

「解放軍とこの地方のモンゴル人が戦争をした。ケセントルゴ方面でたくさん人が殺された。ゴロク地区には内モンゴルから来た騎兵隊が入って男を皆殺しにした」

話があまり悲惨だったので、伝

説というものはこうして作られていくものかと疑ったのだが、事実は政府資料によってたしかめることができた。それによると、この地域の住民の六四%、七五〇〇人が五八年五月三日に決起した。蘭州軍区と青海軍区の解放軍は、六月一日黄河湾曲部の北岸とケセンマニ草原の小山に集結した女子供をふくめた牧民集団を包囲、制圧した。反乱側の戦死したもの二六五、負傷一四三、投降四七六、渡河溺死したもの一一五、その外の死者一二。せん滅されたもの合わせて一五九五人という（『河南県誌』一九九七）。白兵戦なみの殺しかたである。

民族主義にいたるもうひとつのルート

九一年から今年まで数回甘粛青海の草原を歩きまわって、チベット仏教の僧侶のなかにある民族主義とはかなり異なった民族主義的気分がうまれていることに気がついた。それは比較的若くて、強いていうなら八〇年代以後登用された官僚や教師たちのもつ独特の雰囲気である。

かつては中国共産党にとりたてられたチベット人やモンゴル人の官僚は、党の恩に感謝しその路線を口移しに語るしか能がなかった。わたしがはじめて甘粛省南部のチベット人地域を訪れたとき、さる研究所の年輩のチベット人が「はるかな昔、我が国から日本には多くの文化が伝えられた。文成公主の降嫁のときは吐蕃に仏教や絹や小麦がもたらされた」といって、「中華民族」を誇ったことは印象深いことであった。

いまチベット人やモンゴル人の知識人のなかには、そうした中共へのまるごと屈服の気分は少ない。むしろ中央政府ないしは中国人一般のやりかたについて自分の意見をなにげなく語る人がでてきた。いくつかの地域のめだった批判的発言を拾い上げるとこうなる。

(1) 光ファイバー通信のケーブル埋設工事がある、銀行が建つ、発電所が建つ。いまあれこれの新しい仕事が始まっているが、少数民族の同胞はめぼしい仕事に就職できない。牧畜自営制になって牧野がせまく区切られた結果、それまで潜在的だった過剰人口はあからさまになった。牧民のわかものなかには、自分は一家のよけいものだと感じているものがいる。だが、彼らが町で就職するのは絶望的だ。これという部署には中国人幹部が親戚知人の子弟を呼んで入れてしまう。少数民族はいいところ道路工夫だ。

(2) 民族語による中学の卒業生は、民族学院かその他の限られた学校に入れるだけで一般大学には入学できない。民族中学では入試科目の英語が履修できないうえ

に、中国語で入学試験がおこなわれるからだ。これじゃ民族語教育が衰退するのも仕方がない。

(3) 仕方なく中国語による学校に子供を入学させると、子供は中国語を使うことがいいことだと思い民族語を忘れる。残念だ。しかし、子供が高専・大学に行かなくなったらモンゴル人もチベット人も今よりもっと惨めになる。外来の人（中国人）に役所の仕事も独占され、彼らが偉くなるだけだから。

(4) 寺院や民族芸術は正当な評価を受けず、観光資源としてしかあつかわれていない。民族芸術家の歌や踊りは芸術的価値を認められていないようだ。文化大革命のとき壊された寺院は、原形とはまったく違った姿で復元される。なんのための修復だろうか。

(5) 役所の中では、中国人がやれば笑ってすますような失敗でも、チベット人モンゴル人がやると、大声で怒られたり非難されたりおおげさになることがある。

(6) 中国人は絶えず現地少数民族をばかにする。漢字が分からないと教養がないと思い込んでいる。宗教と迷信の境界が分からないから、信仰をばかにする。

(7) 公文書や領収書はもちろん、郵便の宛名すら民族文字では通用しない。漢字で書かなければならない。当地は民族自治州ということになっているが本当に自治州だろうか。

羊の皮袋にたくわえられたバター

新しい傾向のなかみ

州や県政府の官僚は少なくとも中等学校、人によっては民族学院の卒業者で、故郷かその近辺の民族地域に配置されたものである。彼らは現在の地位によって賄賂を得たり、サイドビジネスをやったり、得た金でガラス張りのベラン

ダをもつ豪勢な住宅を建てたりしている。中国人官僚が異動が多いのにくらべれば、彼らはあまり動かないから地元実力者でもある。

そういう体制受益者である彼らが、業務を遂行するなかで中国人による差別や同胞の惨めな生活を知り、ごく自然に民族主義的感情を身につけたのは不思議ではない。民族主義はチベット人とモンゴル人の草地紛争に介入し、自民族を煽って他の少数民族を攻撃するといった悪いかたちであらわれることもあるが、もっとべつな次元で自民族のためにいい仕事をしようとする意欲として現れることもある。

青海省河南モンゴル族自治県は周囲をチベット人に取り囲まれた民族島である。ここのモンゴル人の多くはチベット語を常用語にし、モンゴル語を話す人はだんだんに少なくなっている。衰退しつつあるモンゴル語を教育関係者は学校教育によって復活しようとした。だがそのかいもなく数年の奮闘努力のあと、モンゴル語教育はついに終末を迎えようとしている。期待に反してモンゴル語使用者を増やすことはできなかったが、彼らのやったことの底流には、中共権力を表面にだす巧みな政治性と良質の民族主義が流れているとわたしは思った。

高学歴の少数民族知識人は、中共中央の動向に詳しいし、はるか離れたラサやウルムチの情勢も知っている。ダラムサラーの亡命政府の情報もつかんでいるし、中央アジア各国の動向など外の世界のことも分っている。彼らは寺院の若い坊さんたちのもつ情報とは段違いのレベルに達している。

中共路線で教育されながら、マルクス主義の権威は、公式的にはともかく内実では否定し、一党支配にはもちろん批判的で、中共支配の危機をも予感するという点では、内地の大都市における中国人知識人とおなじである。違うところは多かれ少なかれ仏教信仰を持ち、程度の差はあれダライラマとパンチェンラマを崇拝していることだ。モンゴル人の場合はそれにチンギス汗が加わる。

もちろん、チベット人やモンゴル人の官僚のなかに独立とか民族自治強化などの政治綱領をもった組織があるわけではないし、ダライラマ亡命政府の味方を公然とするわけでもない。しかし、中共中央の動向によっては、いつ寺院の僧侶と結んで民族主義の旗をかかげるかわかったものではない、とわたしは思う。〔この稿を書き上げてから、王力雄『天葬』（明鏡出版社、一九九八）を読む機会があった。チベット人の民族意識を分析した労作である。彼は九九年二月新疆を旅行中逮捕された。〕

（無職）